

## エミリーに薔薇を（ウィリアム・フォークナー）

米國南部のとある町で、没落した名家の女主人エミリー・グリアソンが七十四歳で死んだ。彼女の屋敷の中を誰も久しく見た事がなかつたので、葬式の日、町の人々が好奇の眼差で弔問に訪れた。

グリアソン家は誇り高い家柄で、尊大でもあつたし、厳格な父親がエミリーに男を寄せ附けず、狂人の伯母もゐたりして、彼女は三十歳を過ぎても獨身でゐたが、その裡に父親が死んだ。父親が死んだ年の夏、舗装工事の現場監督として北部人の男がやつて来て、エミリーと親しくなる。結婚するらしいといふ噂が立つが、工事が終るや男は町を立去つた。エミリーは藥局で砒素を入手する。人々は自殺を懸念するが、やがて男が屋敷に入る姿が目撃される。が、その後、彼の姿を見た者はゐない。暫くして屋敷から悪臭が漂ひ出し、苦情が出るが、彼女は一切取合はない。結局、周邊に石灰が散布されて悪臭は消える。エミリーは閉籠りがちになり、

年老いて行くが、鐵灰色の毛髪の艶々した色合は死ぬ迄失はれなかつた。

彼女の葬式の後、屋敷内の或る部屋がこじ開けられた。埃だらけだつたが、新婚用の飾附けが施されてゐて、ベッドの上にはミイラ化した男が抱擁するやうな恰好で横たはり、傍の枕には鐵灰色の毛髪がついてゐた。

エミリーはフォークナーが好んで描く、「過去からの相續によつて歪められ」、おしつぶ壓潰され、道を踏外した者達の一人なのだと或る學者が書いてゐる。誇り高い家柄も嚴格な父親も狂氣の血筋も、エミリーが自ら選び取つたものではなかつた。フォークナーは題名の由來を訊ねられて、「薔薇の花ぐらゐ送つてやらないと、エミリーが餘りに可哀想」だと云つたといふ。己が自由意志の儘にならぬものを人間は誰しも引受けねばならないし、それに壓潰されるしかなかつたエミリーは「可哀想」だと私も思ふ。

けれども、フォークナーが過去の相續人たる人間の悲慘を描いたのは、畢竟、それと戦ふ強さを人間に求めたからに他ならない。彼は人間を尊敬したかつた。だが、尊敬する事の困難を知抜いてゐた。人間は皆多かれ少かれエミリーだからであつて、吾々が人たる者として格闘せざるを得ない、人間の宿命の在るが儘を描く事こそが作家の責務だと彼は信じた。それ故、

一九五〇年、朝鮮戦争の戦況が悪化して、原爆保有を宣言したソ聯の介入が恐れられた頃、彼はノーベル賞受賞講演でかう語つた。今や世界中が「物理的恐怖」に支配され、「吾々はいつ吹き飛ばされるのか」とばかり案じてゐて、最早「精神の問題」は顧みられず、若い作家達も「自らの心と心との格闘といふ、唯一書くに値する問題を忘卻して了つた」。「ノーモア・ヒロシマ」なんぞと云つて、「物理的恐怖」を賣物にする何處かのノーベル賞作家とは雲泥萬里と云ふしかない。

最近、吾々は大震災といふ「物理的恐怖」を経験したが、新井白石は元祿の大地震の折、藩邸に急がうとして氣が急<sup>せ</sup>餘り、折角用意した藥を忘れて「はせ出しこそ恥かしき事に覺ゆれ」と「折たく柴の記」に記した。尊敬する父から學んだ、事に當つて自若<sup>じじやく</sup>たるべき古武士の生き方に悖<sup>もと</sup>つた己れを、白石は心中に恥ぢた譯だが、固より畜生はそんな事は思はない。

今回から本欄の連載を始めるが、古今東西の名作を取上げながら、人が人たる所以についてじっくり考へて行きたいと思つてゐる。